

調査

みんなの通学事情

市外生徒の憂鬱



発行所
網走南ヶ丘高校
報道局
発行責任者
歌丸 昊成

市内・市外勢の割合
(3年次)

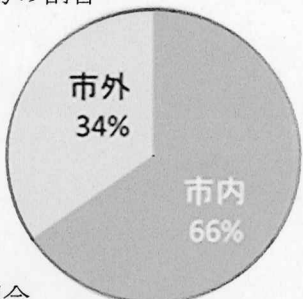


図1

通学手段の割合
(3年次)

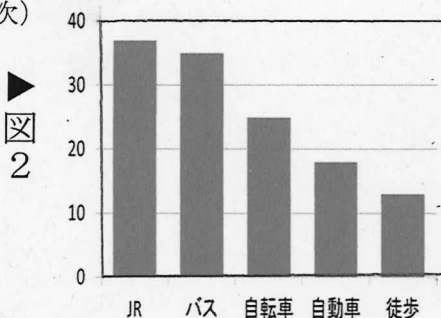


図2

交通機関の使用率

全体の8割

報道局で3年次生を対象に通学事情についてアンケート調査を実施した。(回答数128件)まず市内、市外の割合は市内勢が66%、市外勢は34%と、前者の方が全体の6割を占めており、かなり多いことが分かる。また、通学手段の割合も調査すると圧倒的に徒歩よりもバスやJRなどの交通機関が占める割合が多いことが読み取れる。

ここ網走にある南高には1学年あたり約160名の生徒が在籍しているが、我々は一様に網走から通学しているわけではない。大まかには市内から学校に通う「市内勢」と、市外から学校に通う「市外勢」に二分することが出来る。一般的に市外勢は学校からの距離が遠いことから何かと不便を被りがちだと考えられているが、実際はどうなのだろうか。

理由としては、市外から通学している人たちはもちろん、市内勢でもよほど家が近くない限りは何らかの交通機関を使用しているということがある。そして、通学に際しては、市外から通学している人たちの交通機関利用者の中でも金銭面、時間での負担が大きいとされる市外勢の方々に通学に関する問題や不満を聞き、改善策を探すため、先述の理由と合わせ、局員はインタビューを行った。

市外勢が抱える課題

また、登下校で工夫していることは、という問いに対して、「やはり時間を気にして行動することだ」という。特に冬はかなり寒いので待つことが難しいので時間ギリギリまで学校で待ったり、逆に夏だと外でも待てるので席に座るために早めに部活を上げてから帰るという生徒もいる。



笑顔で取材に答える西田さん

家から駅まで15km

斜里から通学しているという、3年B組の西田さん。

「JRを使っている学校まで通っているけれど、自分の家から駅までが遠いという点が通学のきつさに拍車をかけている。僕が早起きしなきゃいけないと思うくらいには」と自身の通学事情について教えてくれた。斜里から通っている生徒の中でも彼はかなり特殊な例であり、「家から駅に行き、そこからJRに乗って学校に通っているが、まず家から斜里市街地までの距離が15kmあり、駅に行くだけでも大変」と述べている。「そういう事情もあって駅に行くときは親に送ってもらわなきゃいけない。そもそも町まで気軽にいけないから休日も友達と遊びにくい」と西田さんは若干の苦笑いを顔に浮かべながらその境遇について語った。

市外勢と時間の関係性

次に取材に答えてくれたのは、小清水から通学している、3年B組の服部斗さんと、3年A組の畔木颯梧さん。

登下校で困っていることは、という質問に対して「自分で登下校の時間を決められないこと。朝早くに出ないといけないから、かなりの時間を待たないと帰れなかったり。気軽な通学ができず大変」と話した。他にはバスが全然来ないこともそう。割と時間通りに来ないことも多く、最長で12分待ったこともある。と教えてくれた。

やはり市外勢ないし交通機関の利用者にとっても「時間」が他の人よりも非常に重要な意味を持つことが分かる。

次に学校が市外の人に配慮してほしいことは、と聞くと、「登校時のバスの



質問に耳を傾ける畔木さん(写真左)と服部さん(写真右)

浮かび上がる問題点

今回事前にアンケート調査(「登下校に関する不満」という項目)を取ったことがあったが、斜里から通っている生徒の回答の半数以上が「一部の人が車内で騒いでいて非常に迷惑。何とかして欲しい」といった内容のものだった。それだけではなく、車を待つ時間が長いことも不満を抜かす等、マナーの悪さが目立つ生徒が鋼網線利用者の中にもいるようだ。こうした不満がいくつも上がっている以上、この問題を放っておくのは当然だがあまり好ましくないことと言える。

今回のように今まで表に出ていなかった問題点がアンケートの実施から意見として上がり浮き彫りになったわけだが、新聞でこういった生徒の声を取り上げることでこの課題が改善へと動き出す一助となることを切に願う。(歌丸 昊成)

夏炉冬扇

▼日本の北端にも春の訪れを感じる今日この頃。本州よりも一足遅れて北海道にもいちご狩りのシーズンが到来しつつある。意外なことには本州でいちご狩りが盛んな時期は、春ではなく冬であるという。本来のいちごの旬は春から初夏であるが、現在はビニールハウスでの栽培が主流になってきているため、本来の旬とずれている。しかし、北海道ではいちごの露地栽培が主であるため、いちご狩りが盛んな時期は本州とはずれて生じる。北海道と本州では、野菜などの旬が異なるのはよくあることで、トウモロコシや桜の開花時期などはその最たる例であろう。日本は温帯の気候区分に属しているが、北海道は冷帯であるとされているため、多くの場合北海道の方が遅くなる。よって、我々はユースなどを見て、羨ましく思いながらそれらの訪れを待つことになる。▼「待つ」という単語に関連したことわざに「待つが花」がある。意味は期待に胸を膨らませ、あれこれ想像している間が楽しく、実際はそうでもないということだ。旅行や文化祭等、読者の方々も経験があるのではないだろうか。▼北海道のいちごは、いちご本来の旬の時期に食べ頃を迎えるため甘くておいしいため、「待つが花」にはならないだろう。待つ時間も楽しめる北海道のいちご狩り。ぜひ、家族や友人と行ってみたい。(金重 あり)